中世厨子の形式分類について

古代厨子の形式分類から見た中世厨子遺例の検討

A TYPOLOGICAL STUDY ON ZUSHI IN JAPANESE MEDIEVAL TIMES

—A typological study on Zushi in Japanese medieval times on the base of the conclusion
of the typological study of Zushi in Asuka to Nara period—

大野 敏*

Satoshi ONO

Quite a number of Zushi were remarkable in Japanese medieval times. This paper tried to make clear the type of Zushi in this period on the base of conclusion of preceding paper — "Zushi in Asuka and Nara periods." From the investigation, there were "Kuden" style and the eclectic style of "Tengai" and "Chobou" inherited from the previous age. Besides a new eclectic style of these two styles, and another new style introduced from China — "Sangeshoyo Zushi" appeared in this period.

Keywords : *Zushi in Asuka to Heian period, Kuden, the eclectic style of Tengai and Chobo, the eclectic style of Kuden and Tengai, Sangeshoyo Zushi*

古代厨子の形式分類, 宮殿系厨子, 天蓋・帳房折衷厨子, 宮殿・天蓋折衷厨子, 山華蕉葉系厨子

はじめに

中世の仏堂は本尊を厨子に安置することが多い。これは古代の仏堂との大きな相違点である。密教寺院の仏堂内厨子については伊藤延男博士の研究があり¹⁾、その発生についての考察や時代的な変化の概要が示されている。また、関口欣也博士は密教寺院の仏堂における内外陣意匠の変化を厨子を介在として論じた²⁾。このように厨子は中世の密教寺院の仏堂を考える上で重要な存在である。ただし中世の厨子（以下中世厨子という）は、密教寺院以外の寺院仏堂や社殿内においても存在が認められる。しかも屋内に安置されるという性格上、近年その存在が知られるようになったものも少なくない。加えて仏堂・社殿を模した厨子は、建築様式上注目すべき存在であるにもかかわらず、十分な検討はなされていない。さらに厨子に関する宮殿・春日厨子・簀厨子³⁾等の用語についても、管見の限り定義は不明瞭である。これらは厨子の形式が多種に渡っていることによりその分類整理が十分でないことを示している。

無論中世厨子を検討するにあたっては中世以前の厨子の把握が必要である。筆者は先に飛鳥・奈良時代を中心とした古代厨子について、形態による形式分類とその原型について検討した⁴⁾。そこで本論は、その検討結果をもとに広く中世厨子⁵⁾の遺例を展望し、形態に基づいた形式分類を試みたい。

1 中世以前の状況

1-1 厨子として扱う範囲

まず厨子として扱う範囲を確認しておく。飛鳥・奈良時代において「厨子」と記す事物を通覧すると、扉付の箱・筒あるいは棚と理解できる。しかも納物は経巻や文具類が主で、仏像は少ない。しかし現在厨子という場合、特に寺社建築においては、堂内に安置されて仏像・絵像・舍利・経巻等を納めた仏龕類や、祭神をまつた社殿内神殿をさすことが一般的である。したがって本論で扱う厨子の範囲は、このような仏龕や社殿内神殿と理解する。なお小塔の場合、堂内に安置されて舍利をまつる点において仏堂や社殿を模した厨子に類似するが、大きさの大小にかかわらず塔としての機能や形態に変わりにないため、仏龕としての厨子とは別個と考える。また、龕・御輿・高座等も厨子と緊密な関係にあるが別個と捉えておく。

1-2 飛鳥・奈良時代

飛鳥・奈良時代の厨子はその形態により①仏堂を模したもの、②四角天井を柱で支えたもの、③六角形・八角形屋蓋を柱で支えたもの（屋蓋は反り起りや葺手隅木が認められる場合が多い）、④箱・棚または筒、以上4形式分に類可能である。そして①は宮殿、②は仏台、③は六角殿・宝殿、④は厨子というように形式別に固有の呼

* 川崎市立日本民家園 技術職員

Architect, Open Air Folkhouse Museum Nihon Minka-En

称が対応していたと考えられる。しかも各形式の原型を考えると、①は建築物、②は中国古代における貴人の座臥具である帳房⁶⁾、③は円形天蓋、④は箱・筒で、形式の違いは原型の差が直接あらわれたものと理解できる。すなわち原型の違いを系統と表現すると、飛鳥・奈良時代の厨子は4系統4形式が存在することになる。

1-3 平安時代

平安時代の厨子は資料に乏しいが、法隆寺夢殿内旧厨子の一次改造時(平安末頃)や奈良博蔵金銅装舍利厨子のように、蔵手隅木(以下蔵手という)付の反り起り宝形屋蓋を持つ第5の形式が目される。前者は帳房原型の厨子に蔵手付反り起り屋蓋を補加したもので、この形式が飛鳥・奈良時代の厨子における②と③の折衷によることを示している。文献によると永承7年(1052)以前の延暦寺根本中堂内厨子⁷⁾も同様である。仁和3年(887)『広隆寺資財交替実録帳』が記す「斗帳」⁸⁾は周囲に帳を垂らしたと推察され、葱花形屋蓋により宝形造とわかるが、蔵手や反り起りは確認できない。ただし我が国において帳房原型厨子が宝形造屋蓋をかかげたことが認められる初出⁹⁾で、9世紀末に第5の形式の厨子の萌芽を認めてよい。

なお、延暦寺根本中堂内厨子は「四角仏殿」と記すのに対し、筒形厨子を「円仏殿」と呼ぶ例もあるので¹⁰⁾、平安時代には厨子の形式と呼称の関係は必ずしも明確な対応関係を保たなくなるらしい。

1-4 古代厨子の形式分類

古代全体を通してみた場合、飛鳥・奈良時代の4形式に平安時代の1形式を加えた5形式が存在するが、系統は飛鳥・奈良時代の4系統の範疇にある。そこでこの5形式を呼称や原型にちなんで①宮殿系厨子、②帳房系厨子、③円形天蓋系厨子、④箱・筒系厨子、⑤天蓋・帳房折衷厨子と呼ぶことにする。

2 中世厨子の遺例の検討

中世厨子の遺例収集は『文化庁編国宝・重要文化財建造物目録』(平成2年度版)による附指定物件、中世の仏堂・社殿修理工事報告書による内部安置厨子の確認、各都道府県の近世社寺建築緊急調査報告書記載の中世厨子に関する報告、『都道府県指定文化財建造物目録』¹¹⁾など文化財建造物関係資料を中心に行い、美術工芸関連資料¹²⁾により補足した。こうして抽出した中世厨子の遺例は250例以上に上り、悉皆調査には至らないが主要なものは抽出できたと考えられる。これらを古代厨子の形式分類に即して検討する。

2-1 宮殿系厨子

古代における宮殿系厨子の遺例は玉虫厨子と阿弥陀三尊及二比丘像厨子の2基であったが、中世厨子の遺例のうち建築物を模したと考えられるものは130例147基にのぼる(文末表1)。このうち墨書や記録等で造立当時あるいは修理時の呼称が判明するものに注目すると宮殿22例¹³⁾、厨子4例、御殿2例、玉殿2例、宝殿1例、小宝殿1例、社頭1例で、宮殿が主であることが明らかである。なお22例中には口伝、空殿と記すものが1例ずつ含まれ、「くうでん」と発音したことが窺われる。また、宮殿系厨子は遺例数が多いだけでなく、本尊や祭神をまつり堂内中央に安置された厨子(以下本尊厨子と呼ぶ)がほとんどを占める点でも重要な存在である。

中世の宮殿系厨子は規模、建築様式、堂内配置法、堂との関係、壇との関係、納物等により様々な検討方法が考えられる。ただし細部にわたる詳細な検討は本論の目的ではないので、規模と建築様式

の概要についてふれるにとどめる。

厨子の場合、柱間による規模と斗拱配置による見かけ上の規模は必ずしも一致しない。むしろ意図した建築の規模は斗拱配置に表れるため、斗拱配置からみた規模に注意する必要がある。

建築様式は、禅宗様・大仏様の新様式がどの程度浸透しているのかを把握することが重要であろう。したがってここでは和様・禅宗様の概念をそれぞれ純粋な様式のみと捉え、和様色が強くても木鼻・拳鼻・実肘木絵様削形や頭貫以外の貫使用など一部に新様式の摂取が認められるものは和様系と呼び、禅宗様が強くても中備が疎組であるとか平行軒である場合は禅宗様系と呼んで区別する。折衷様は、基本的に肘木・尾垂木等の斗拱主要部が禅宗様になるものと捉える。なお、様式を考える場合、意図した建築が仏堂か社殿かによって形態が異なるので、同規模でも区分して捉える必要があろうし、厨子を取る建築が仏堂か社殿による傾向も把握する必要があろう。このことを考慮して、文末表1をもとに宮殿系厨子の概要を示したものが表1である。これらにより以下の点が指摘できる。

(1)宮殿系厨子の遺例は中世全般に分布するが、特に室町後期に多数認められる。また、147基中141基までが本尊厨子である。

区分	形式	図例した口窓の規模と和宗(注) 口窓は正面見かけ上の柱間数	時代区分					小計	
			和合前期	和合後期	室町前期	室町中期	室町後期		
仏	和	1間仏堂				1	2	3	
	和	2間仏堂	1					1	
	和	3間仏堂		1		1		2	
堂	系	3間仏堂			3		2	4	
		1間仏堂		2				2	
		2間仏堂	1	1			9	12	
内	折衷	3間仏堂			5		4	2	
	和	5間仏堂				2	1	11	
	和	1間社流造					1	1	
	和	1間仏堂		2				2	
	系	3間仏堂	1	2			9(1)	11	
子	和	1間仏堂			1(1)	6	22(1)	29	
	和	1間仏堂(岩保羽殿込み)				1		1	
	和	3間仏堂			1(1)	2	3	6	
	和	3間露附付仏堂					1	1	
小 計			2	6	17(2)	15	59(2)	99	
社	和	流見世口窓				3		3	
		春日見世口窓		3				3	
		切交見世口窓					2	2	
		切交窓廻縁		2				4	
		宝形窓廻縁		1	4			5	
	内	間	入母屋窓廻縁		1			1	2
		入母屋窓廻縁		1			1	1	
		入母屋窓廻縁					1	1	
		3間正面入母屋窓廻縁			5			5	
		子	和	流見世口窓					3
和	春日見世口窓			1			1	2	
和	切交見世口窓						3	3	
和	切交窓廻縁						1	1	
和	入母屋窓廻縁						1	1	
子	和	3間社流見世口窓					1	1	
	折衷	1間入母屋窓廻縁					1	1	
	和	1間切交見世口窓			1	3	3	7	
	和	3間切交見世口窓			1			1	
	和	2間正面入母屋窓廻縁					2	2	
小 計			0	8	11	8	21	48	
合 計			2	14	28(2)	23	80(2)	147

図1 宮殿系厨子の例 観福寺本堂内厨子復原正面図 縮尺 1/80

- ・大野口蓋による復原図
- ・屋根桁付と鬼は推定による
- ・正面柱間は当初は開放と考えられる
- ・造立年代は宝治2年(1248)

(2)仏堂内の宮殿系厨子は、時代と共に新様式の影響が大きくなる。すなわち鎌倉前期における新様式の摂取は大仏様木鼻(観福寺本堂内厨子・宝治2年1248、和様系)に限られるのに対し、鎌倉後期に折衷様と禅宗様系が加わり、室町前期はこれらの遺例数が過半数を占める。そして室町中期以降は禅宗様が多数を占めるに至る(14)。

(3)仏堂内の宮殿系厨子は、鎌倉後期～室町前期において、3間以上の規模を意図した遺例が過半数を占める。

(4)社殿内の宮殿系厨子の場合、社殿建築の主流である流造・春日造を意図したものは48基中12基で、残りは多様な形式(15)に細分可能である。ただし流造・春日造をはじめ25基が見世棚造という簡略表現を示し、見世棚造以外の遺例も屋根や軸部・斗拱に簡略化が認められるなど、概して簡略につくられている。

(5)社殿内の宮殿系厨子の規模は1間が多い。2間以上の遺例は室町前期の6基と室町後期の2基だけである。なお、精緻な建築表現を示す厨子(住吉神社本殿内玉殿=5基:応安3年1370、小菅神社奥社本殿内厨子=2基:永正5年1508)はいずれもこの中に含まれる。

(6)社殿内の宮殿系厨子における新様式の摂取は、鎌倉後期に和様系があらわれ、その後室町前期に折衷様、室町後期に禅宗様系が加わる。ただし室町後期に至っても純粋な禅宗様は認められず、しかも室町後期の遺例21基中に和様または和様系が13基含まれる。すなわち、仏堂内の宮殿系厨子に比べて和様の影響が根強い。

2-2 帳房系厨子

長福寺本堂内厨子(正和2年1313)は、正面柱間を開放し絵像を本尊とする点において帳房系厨子との関わりが想起される。しかし屋根板が反り起りを造り出す点は円形天蓋の影響と考えるのが自然で、後述する天蓋・帳房折衷厨子の範疇で捉えるべきである。また、興福寺弥勒像厨子(鎌倉)は軸組を上下二段の長押で固め扉を吊り込み、腰長押下を格狭間、内法長押上を連子とし、屋根は天板をのせる。いわば屋根と軒のない天蓋・帳房折衷厨子とでも言うべきものであるが、平天蓋をかかげる点は帳房系厨子の影響と考えることもできよう。このように、中世厨子においては、帳房系厨子そのままの形式を継承した遺例は認められない。

2-3 円形天蓋系厨子

この形式の特徴は蔵手隅木付の多角形反り起り屋蓋にある。

8世紀末頃造立の当麻寺本堂内厨子は、従来柱間開放であったも

のを仁治3年(1242)に扉構に改めた。この改造の目的は本尊当麻曼陀羅の保護にあり、従来の曼陀羅を板装に改め背面に配し、新しい曼陀羅を正面に奉懸した。なお、修理銘によると仁治には厨子と呼んだことがわかる。当麻寺本堂内厨子と同じく扁平六角平面を有するのは法隆寺六角厨子(鎌倉前期)で、内部は板壁で前後に2分し、背面奥行を浅くとして壁面に補陀洛山を描く。正面は観音像をまつたと思われるが、現在は聖徳太子像をまつる。蔵手付反り起り宝形屋蓋はすべて新材に替わっており、以前は大破の状態であったことが窺われる。この厨子は扉を有する六角殿の形式を伝えるものであるが、扉式六角殿は本来彫像をまつるのが通例で、正面に彫像、背面に絵像を使い分ける方法は新しい。当初の呼称は明らかでないが、寛文5年(1665)の基壇墨書は厨子と記す。

東大寺開山堂内厨子(鎌倉)と広隆寺桂宮院本堂内厨子(室町中期頃)は、蔵手付反り起り八角宝形屋蓋を設け、正面側に扉を備え、御彫像(それぞれ良弁座像・聖徳太子像)をまつる。

藤田美術館蔵八角厨子(鎌倉)は正側三面に扉を設け中間の柱間に連子窓を配し、八角仏堂に類似する意匠をみせる。ただし内法上を連子、腰下を格狭間嵌込みとする点は他の厨子と共通する。

藤田美術館蔵六角厨子(鎌倉)は柱間を開放し、高欄付六角二重基壇上に立つ。高欄付基壇は『西大寺資財帳』の六角漆殿(16)を彷彿させるもので注目に値する。ただしこの厨子の反り起り六角宝形屋蓋は蔵手を省略する。大般若経厨子(鎌倉、奈良博保管)も蔵手省略の反り起り六角宝形屋蓋を有するが、底板・壁板・屋根からなり正面に扉を構える構成は、後述する箱・簡系厨子に類似する。個人蔵愛染明王厨子(室町)も同類で、この場合は円形平面であるため一層箱・簡系厨子に近い。

仁和寺愛染明王厨子(鎌倉)と観心寺愛染明王厨子(室町前期)は反り起りを持つ軒板兼用屋根板を巡らし中央に天板を乗せ、六角宝形屋蓋をつくる。すなわち簡略化の進んだ屋蓋形式を示す。

以上のように中世における円形天蓋系厨子は、屋根に簡略化が認められるものや、箱・簡系厨子に類似するものが存在する。こうしたものを含めても遺例は8基と少なく、年代は鎌倉時代に集中しており、次第に衰退する傾向が認められる。納物は彫像をはじめ絵像や舍利、経巻と多岐に渡り、古代のような明確な使い分け(柱間開放の場合は絵像・扉式の場合は彫像)は見られない。なお、六角平面の厨子2基について厨子という呼称が認められるが、六角殿という呼称は確認できない。

2-4 箱・簡系厨子

正面に扉を備えた単純な箱形厨子は、西大寺愛染明王厨子(室町前期)、西大寺大神宮御正体(室町前期)、額安寺首掛曼陀羅厨子(至徳4年1387)がある。後2者は吊金具を備えた携帯目的の厨子である。

天板・底板から長押を造り出す箱形厨子は、旧神光院宝篋印塔嵌装舍利厨子(嘉禄2年頃1226)をはじめ、室町前期～中期に7基を認める。この厨子は正面あるいは正背両面に扉を設け、舍利を嵌装したり絵像をまつる。

行脚僧や修験者が用いる笈も、仏像や仏具を携帯する目的からみると箱形厨子の一種と捉えることができる。遺例はいずれも室町時代のもので、内部を2～3段に仕切る場合が多いが、藤田美術館には内部を区切らず浅唐戸を釣り込んだ笈型厨子が存在する。

筒型厨子は、木瓜形の平面を有する称名寺愛染明王厨子(鎌倉後期

図2 円形天蓋系厨子の例 当麻寺本堂内厨子仁治3年改造時正面図 縮尺 1/80
『国宝 当麻寺本堂修理工事報告書 附図II (昭和35年)』より

頃)がある。ただしこの厨子は軒をわずかに延ばして六角形近似の反り起り屋根をかかげることから、円形天蓋系厨子の影響が窺われる。

以上、箱形厨子は中世を通じて存在するが、小型で携帯目的としたものが多く、本尊厨子として用いる例は認められない。

2-5 天蓋・帳房折衷厨子(文末表2)

この形式は、平安時代において蔵手付反り起り四角宝形屋蓋を設けた柱間開放の厨子が確認できることにより、天蓋系厨子の屋蓋と帳房系厨子の平面が折衷したものと考えた。この折衷の考え方によると、当麻寺本堂内厨子のような六角寄棟屋蓋と、帳房系厨子の矩形平面との折衷により、寄棟屋蓋があらわれる可能性もある。しかし蔵手付反り起り寄棟屋蓋を有する厨子は、東大寺法華堂内執金剛神厨子(鎌倉前期)を初出とすることから、宝形屋蓋の場合よりも遅れる。つまり天蓋・帳房折衷厨子は宝形造と寄棟造に細分できるが、両者に年代的な隔たりが認められたため、単なる屋蓋形態の差ではないらしい。そこで宝形屋蓋形式と寄棟屋蓋形式に分けて検討する。

宝形屋蓋形式の天蓋・帳房折衷厨子

8世紀末頃造立の法隆寺夢殿旧厨子は4本柱で平天井を受け、柱間開放とし周囲を帳で囲った帳房系厨子であった。平安末期頃に蔵手付反り起り宝形造屋蓋を補加し、寛弘2年(1230)夢殿改造時に二次改造を施し、より傾斜の強い屋蓋に改めた。この状態の厨子を嘉禎4年(1238)頃の『聖徳太子伝私記』は御殿と記す¹⁷⁾。唐招提寺舍利厨子(鎌倉前期)は方形台座上に柱を立て蔵手付反り起り宝形屋蓋をかかげたもので、元亨2年(1322)台座修理銘により御舍利宝座と呼ばれたことがわかる。柱は4本共継ぎ足されており¹⁸⁾、脚元は高欄で築ぎ、上方は内法長押で固め、柱頂は直接接を受ける。内法長押上は各間横盲連子嵌とし、内法下は開放とする。法隆寺聖徳太子座像厨子(鎌倉前期)や円成寺本堂内厨子(文明4年頃1472)も同様である。ただし前者の場合、現状は柱間を拡張するとともに背面を板嵌とし、屋根も造り替えている。円成寺本堂内厨子の場合、柱上に三斗を組み中備に葦股を配す点が特徴で、しかも実肘木や桁鼻の絵様削形に禅宗様の影響が認められる。以上5例は柱間を開放か本来柱間開放だったもので、その形態は簾や高座と類似する。

唐招提寺鼓樓内厨子(室町前期)は、正側三面に扉を吊り背面に引違戸を設け、法隆寺舍利殿内小厨子(貞和3年頃1347)と能満院舍利厨子(明応元年1492)は4面とも扉構とする。これは柱間開放の名残を示すものであろう。また、大報恩寺本堂内厨子(安貞元年頃1227)、旧園城寺常実坊厨子(室町前期頃)、室生寺本堂内厨子(延応元年頃1308)、岩船寺普賢菩薩厨子(室町前期)、高山寺火焰宝珠舍利厨子(室町前期)が正側面を扉構とするのも同様であろう。これら8基は軸部を腰長押・内法長押で固め、内法長押上は連子、腰長押下は格狭間を表現し、蔵手付反り起り宝形屋蓋をかかげるのが標準と考えられる。このうち法隆寺舍利殿内小厨子の屋蓋は、周囲に反り起り付の軒板兼用屋根板を巡らして天板を重ねたもので、蔵手はない。この厨子は規模が小さく、側背面は壁板を扉に見せかけたもので、壁板を組んで長押で固めた構造はいわゆる簾厨子である。すなわち軸部や扉の構成からみて、屋蓋も簡略表現と理解できる。能満院舍利厨子も同様な簡略表現である。これに対して室生寺本堂内厨子は、斗拱を和様三斗組とし中備に本葦股を配す。

扉口を正面にのみ設けるものは以下の5基である。法界寺阿彌陀堂内厨子(鎌倉後期頃)は反り起りのない蔵手付宝形造屋蓋とし、

室生寺弥勒堂内厨子(室町中期)は蔵手のない宝形造屋蓋とする。新羅善神堂内厨子(貞和頃1350)は、柱上斗拱が舟肘木にもかかわらず正面に葦股を配するのが特徴で、蔵手付宝形造反り起り屋蓋とする。旧東大寺食堂内厨子(貞和3年1347)と鶴林寺厨子(永享8年1436)は、法隆寺舍利殿内厨子のような簡略型の反り起り宝形屋蓋をかかげる。

以上のように、宝形屋蓋形式は中世全般に分布し、この中には平安時代以来の柱間開放形式をとどめるものが存在する。また、3面以上を扉構とするものが12基存在する点も注目され、柱間開放の名残を示す。なお、室町時代に至ると、蔵手を省略したり、軒板兼用屋根板と天板を用いて屋蓋を簡略につくるものがあらわれる。その反面、三斗組や葦股を用いて豪華に見せるものも認められる。しかも斗拱の様式に注目すると、室生寺本堂内厨子の和様に対し、円成寺本堂内厨子は実肘木と桁に禅宗様の影響が認められる。こうした年代差による様式の変化は、宮殿系厨子の場合と同じ傾向を示す。

寄棟屋蓋形式の天蓋・帳房折衷厨子

蔵手付反り起り屋蓋を持つ厨子は、東大寺法華堂内執金剛神厨子をはじめ室生寺弥勒堂内脇厨子(鎌倉、他所より移す)、兵庫太山寺本堂内厨子(弘安元年1278)、長寿寺本堂内厨子(応永9年以前1402)と続く。この4基は矩形平面の1間厨子で、軸部を腰長押・内法長押で築ぎ正面に板扉を吊り込み、内法長押上は連子、腰長押下は格狭間を表現し、柱上に舟肘木を組んで宝形造屋蓋を設ける等共通点が多い。長寿寺本堂内厨子の場合、扉に応永9年の修理墨書が記されていることから、厨子自体の造立はこれを遡ることが明らかで、室町前期は降らない。したがって4基とも年代は中世前半に含まれることになる。また、墨書によると、太山寺本堂内厨子および長寿寺本堂内厨子は、それぞれ図子および厨子と呼ばれたことがわかる。

三間厨子に蔵手付反り起り寄棟屋蓋をかかげたものは旧燈明寺本堂内厨子(室町前期)が唯一である。しかも柱上に出三斗を組んで中備に葦股を配す点は、宝形屋蓋形式の3例(室生寺本堂内厨子・園城寺新羅善神堂内厨子・円成寺本堂内厨子)と同類と認められる。

以上5例はいずれも蔵手付の反り起り寄棟屋蓋を有していたが、反り起り屋根板兼用軒板を周囲に巡らし中央を天板でふさぐ厨子も存在する。しかも浄瑠璃寺本堂吉祥天厨子(建暦2年頃1212)、旧法隆寺食堂内厨子(文永5年1268)、靈山寺本堂内厨子(弘安8年1285)、長福寺本堂内厨子(正和2年1313)、法隆寺舍利殿内厨子(貞治3年1364)、医王寺厨子(康応2年1390)、旧法楽寺厨子(長祿4年1460)、春日宮曼陀羅厨子(文明11年1479)、火焰宝珠装舍利厨子(永正5年

図3 天蓋・帳房折衷厨子(宝形屋蓋形式)
大報恩寺本堂内厨子正面図 縮尺 1/80
『図宝 大報恩寺本堂の工芸的調査(昭和29年)』より

図4 天蓋・帳房折衷系厨子(寄棟屋蓋形式)
妙楽寺本堂内厨子正面図 縮尺 1/80
『図宝文化財 妙楽寺本堂の工芸的調査(昭和37年)』より

1508)、興福寺春日曼陀羅舍利厨子(天文6年1537)、天満神社本殿内厨子(永禄8年1565)など中世全般に分布し、遺例も多い。軒板に天板を重ねる(以下軒板・天板式という)反り起り屋蓋は、先の宝形屋蓋形式にも認められ、簡略表現と理解できる。こうした軒板・天板式の屋蓋を持つ厨子で呼称がわかるものは11例あり、厨子(御厨子・厨司を含む)7例、舍利殿3例、殿1例である。ただし舍利殿・殿の呼称は非本尊厨子に限られる。

醍醐寺清龍宮本殿内の外厨子と内厨子(共に応永12年1405)は柱形造り出しの壁板を長押で繋ぐ組立式で、構造からみた分類は簀厨子であり、箱・筒系厨子の類型とも考えられる。ただし外観をみると、外厨子は天板が軒板状にせり出しており、内厨子は天板を2段に重ね、ともに簡略な屋蓋を造る意図が認められる。この屋蓋は反り起りでないが、扁平な形態は浄瑠璃寺本堂内吉祥天厨子に通じ、軒板・天板式の一層簡略な姿と捉えることができよう。したがって外厨子および内厨子は天蓋・帳房折衷厨子の類型と捉えておく。白山神社本殿内厨子(京都、享禄5年1532)、円教寺護法堂内厨子(永禄2年頃1559)も同様である。呼称が判明するものは外厨子および内厨子の2例4基で、それぞれ外御厨子・内御厨子と呼ぶ。

以上寄棟屋蓋形式の厨子は、遺例の上で宝形屋蓋形式より遅れてあらわれるが、鎌倉後期以降は天蓋・帳房折衷厨子の多数を占めるようになる。そして本来の蔵手付屋蓋が室町前期以前に限られるのに対し、軒板・天板式の屋蓋は中世全般に存在する。つまり室町前期を境に屋蓋の簡略化が加速する傾向が認められる。しかも室町中期以降、箱・筒系の厨子の一部を包含するに至ったと考えられる。なお、呼称については厨子が一般的であった。

2-6 新たな折衷による新形式(宮殿・天蓋折衷厨子)

不動寺本堂内厨子(室町中期頃)は斗拱以下を禅宗様に造るが、屋蓋は軒板兼用の屋根板を周囲に巡らし天板部分を緩い切妻造にした特殊なもので、略式の入母屋造のように見える。しかし蔵手や軒板

図5 宮殿・天蓋折衷厨子の例 木幡神社本殿内宮殿正面図 縮尺 1/40
『重要文化財 木幡神社本殿・楼門修理工事報告書(昭和37年)』より

図6 山華蕉葉系厨子の例 定光寺仏殿内の宮殿型厨子正面図 縮尺 1/80
『国宝建造物定光寺本堂維持修理工事報告書(昭和14年)』より

・天板式反り起り屋蓋の存在は明らかに天蓋・帳房折衷厨子の影響と認められる。なお、天蓋・帳房折衷厨子では蔵手付屋蓋の簡略化として軒板・天板式屋蓋を位置付けたが、ここでは両者が併存している。このことは過渡的な状態を示しているのかも知れない。

蔵手はないが、軒板・天板式反り起り屋蓋と宮殿系厨子の折衷は、木幡神社本殿内厨子(室町中期)、善光寺本堂内厨子(室町中期)、浄福寺観音堂内厨子(室町後期)、観心寺聖僧像厨子(室町後期頃)である。さらに軒・屋根兼用で反り起り宝形造屋根をかかげたものとして光前寺弁天堂内厨子(明応9年頃1500)がある。

軒先まで仏堂建築同様に造り、屋蓋を蔵手付反り起り宝形造とした厨子は、赤城神社本殿内宮殿(室町後期)と日吉神社本殿内宮殿(室町後期)である。この2基は御輿に類似する存在である。他に蔵手付反り起り屋蓋をかかげた例は諏訪神社本殿内宮殿(熊本、室町後期)があるが、これは軒板・天板式の屋蓋を有する。

以上は、建築を原型とする宮殿系厨子と、円形天蓋原型の非建築的な屋蓋を折衷したもので、従来にない組み合わせである。したがって新たな折衷による独立した形式として宮殿・天蓋折衷厨子と位置付ける。遺例は室町中期以降に認められる。(文末表3)

2-7 古代の系統で説明できないもの(山華蕉葉系厨子)

円通寺厨子(永禄4年1561)は斗拱以下を禅宗様に造るが、軒桁上は如意頭を刻んだ吹返し板をめぐらし、天板でふさぐ。これは『营造法式』小木作所載の「山華蕉葉仏道帳」に類似することから、宋代の厨子形式を伝えたものと考えられる。同様の遺例は観現寺本堂内厨子(室町中期)があり、装飾化の顕著な例として妙立寺厨子(永正10年1513)がある。また、現状は破損が著しいが恵日寺厨子(応永30年1423)も同形式と考えられ、年代の明らかなものとしては最古例である。戦災で焼失した東漸寺薬師堂内厨子(永正15年1518)は、方一間の中心部を山華蕉葉仏道帳風につくり、両脇に唐破風状の片流れ屋根の庇を付した特徴ある厨子で、墨書銘は宝殿と記す。

前記5例は独立した厨子であるが、禅宗様仏殿の中には『营造法式』小木作所載の「山華蕉葉壁帳」類似の厨子を設けるものがある。高倉寺観音堂・永保寺開山堂・天恩寺仏殿(いずれも室町前期)や、清白寺仏殿(応永20年1413)・定光寺仏殿(明応9年頃1500)がこれに該当し、仏壇あるいは脇仏壇位置に造り付けとする。

以上の厨子は「山華蕉葉」と表現される葺き返し板の存在が特徴で、宮殿系厨子とは異質である。一方、葺き返し板は古代の帳房系厨子にも認められるが、帳房系厨子を含むには禅宗様建築の色彩が強い。したがって古代の4系統とは別個の系統と認めるべきで、山華蕉葉系厨子と呼ぶことにする。形式は独立式(仏道帳)と造付(壁帳)に分類でき、遺例は室町前期を初出とする。

結 語

古代厨子の系統および形式分類をもとに中世厨子の遺例を通観すると、①古代厨子の形式分類が有効なもの、②古代厨子の系統の範疇で新たな折衷を形成するもの、③古代とは別個の系統に属するもの、以上の3区分で捉えることができる(表2)。

古代厨子の形式分類が有効なのは、宮殿系厨子、円形天蓋系厨子、箱・筒系厨子、天蓋・帳房折衷厨子の4形式である。円形天蓋系厨子は遺例数が少なく、年代も鎌倉時代中心で、次第に衰退する傾向が認められる。箱・筒系厨子は中世全般に存在するものの、規模が

文主表1 中世の宮殿系厨子(つづき)

年代	名称	場所	年代	西暦	呼称	建築様式	平面	柱	軸部	木鼻	斗拱	斗拱	中継	軒	屋根	本建	参考文献等
後	南禅寺本堂内厨子	滋賀	(建永3)	1308		1切和	1-1	南内	良(南内)	無	1-1	向財木	ナシ	板軒	切/板	○	解、要成2
	法保寺本堂内厨子	和歌山	(延永4)	1311		1折衷仏堂	1-1	上舞九	土/良(地内)内/良(舞九)	有	1-1	折衷出組	結組	二軒	軒/本瓦型板	○	解、要成7
	法用寺本堂内厨子	福島	(延永3)	1314	宮殿	3折衷仏堂	3-2	上舞九	土/良(舞九)内/良(舞九)	有	3-2	折衷4手	ナシ	二軒	当り不明	○	実査、文化庁資料
	南禅寺本堂内厨子	京都				2折衷仏堂	1-1	九	良(地内)内/良(舞九)	有	2-1	折衷2手	開斗	二軒	軒まで	○	解説、実査
	南禅寺本堂内厨子	福島	室中以降			3折衷仏堂	3-1	舞九	良(舞九)内/良(舞九)	有	3-1	折衷出組	結組	二軒	人/板	○	解、要成7
	宝蔵院本堂内厨子	神奈川				1折衷仏堂	1-1	上舞九	土/良(舞九)内/良(舞九)	有	1-1	舞3手	結組	二軒	人/2手	○	神奈川文化財図録
	大正寺本堂内厨子	長野	室中			1折衷仏堂	1-1	上舞九	土/良(舞九)内/良(舞九)	有	1-1	舞3手	結組	二軒	人/本瓦型板	○	長野県史
	南禅寺本堂内厨子	愛知				3折衷仏堂	3-2	上舞九	良(舞九)内/良(舞九)	有	3-2	舞2手	ナシ	二軒	人/2手	○	保存団
	南禅寺本堂内厨子(3基)	滋賀				1宝形和	1-1	角	良(南内)	ナシ				板軒	切/板	○	文化庁資料
	金剛寺本堂内厨子	滋賀				3和系仏堂	1-1	九	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-2	和系3手	本舞段/舞東	二軒	人/板	○	修理工事報告書
可	浄土寺本堂内厨子	滋賀				3和系仏堂	1-1	九	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-2	和系出組	本舞段/舞東	二軒	人/2手	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	九/面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	本舞段/舞東	二軒	軒/相模型板	×	解、実査
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	軒/本瓦型板	○	解、実査
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	切/2手	○	浄土寺(三浦氏)
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	人/板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
前	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
中	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
後	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書
	浄土寺本堂内厨子	兵庫				3折衷仏堂	3-1	面角	土/良(舞九)内/良(舞九)	無	3-1	和系出組	結組	二軒	板	○	修理工事報告書

文永 1 中世の宮殿系園子（つづき）

[illegible]

文末表2 中世の天蓋・帳房折衷厨子

注1 ()は竈の年代が明らかで房子も同時と推定されるもの 注2 正面柱間・側面柱間、吹：吹き出し

注2 正面柱間・側面柱間、吹：吹き放し。

注3 假：假告口、每日口文：毎日新聞社『口文文化財』、奈六：奈良六大寺大図、京成：日本經濟史基礎資料京成

区分	件名	期 (西)	年代	西口	呼称 (非当)	形式・内容 注2	平国 注2	上：土、石、地、地蔵、台、石等	中口	坪	口	根（段）付	口	坪	口	坪	口	坪
												配：反り起り、口：口手付						
												口：口面・口面						
部	旧東山寺光明寺内蔵子陀羅尼子	滋賀			密教	101	底版/宝珠/天板	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	正背3面版刷	X	奈良円國				
部	高山寺日光院子	京都			密教	101	土/瓦(殿内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	正背3面版刷	X	奈良円國				
部	法成寺宝篋千手菩薩子	奈良			密教(双手)	101	良(内)	南木ナ	ナシ	板一枚(後)	宝形/起/宝珠/宝珠以外後	開版	X	奈良六大学大図4				
部	法成寺法華堂内鉄金剛神子	奈良			密教(双手)	101	良(地蔵内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	宝形/起/宝珠/宝珠以外後	開版	X	奈良六大学大図12				
部	明徳寺舍利子(礼堂安仁)	奈良	(昭和2)	1202	(白河宝印)	密教(双手)	101	良(内)右、柱様上	南木ナ	ナシ	板一枚	宝形/起/宝珠/宝珠以外後	開版	X	奈良六大学大図12			
部	浄徳寺本堂吉祥天母子	京都	(昭和2)	1212		密教	101	良(地内)/台	ナシ	ナシ	板二枚	宝形/起/併板・天板	正背3面版刷	X	大和古寺大図			
部	大徳寺本堂内子	京都	(寛弘)	1227		密教(双手)	101	良(地蔵内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	宝形/起/宝珠/宝珠以外後	正背3面及折版刷	X	妙工寺保告口			
部	法成寺山内陀羅尼子(即合改造時)	奈良	(寛弘)	1230	御願	密教(双手)	101	開版	大斗形	ナシ	板一枚	宝形/起/宝珠/宝珠以外後	不明	X	妙工寺保告口			
部	役所寺密護聖觀音菩薩合利子	奈良	(長良)	1253		密教(双手)	101	良(地蔵内)上	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	大和古寺大図			
部	旧法成寺舍利子(現飛越安江)	奈良	文永5	1268	関子	密教	101	土/良(殿内)上	当初不明	当初不明	板一枚	寄附/起/併板・天板、当初不明	3折版刷、当初不明	X	奈良六大学大図1			
部	真言寺宝印密護聖觀音合利子	福島				密教	101	底版/寶珠/天板(屋根型)	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	奈良円國			
部	地蔵院本堂内子	栃木				密教	101	土/良(殿内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	正背3面及折版刷(両片)	〇	妙工寺保告口				
部	法成寺光明寺内子	京都			密教(双手)	101	土/良(殿内)上	ナシ	ナシ	板一枚	宝形/起/宝珠/宝珠以外後	版刷	X	奈良六大学大図14				
部	室生寺光明寺内子	奈良			密教(双手)	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口				
部	室生寺光明寺内子	奈良			密教(双手)	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口				
部	金山寺密護聖觀音菩薩合利子	奈良				密教	101	土/良(殿内)上	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	奈良六大学大図14			
部	千手寺子	奈良				密教	101	上良(内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	奈良六大学大図14			
部	只知寺弥勒菩薩像子	奈良	天明ころ			密教	101	良(内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	奈良六大学大図14			
部	金剛寺成身會八世轉輪子	和歌山				密教	101	土/良(殿内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	奈良六大学大図14			
部	自門院本堂内子	福岡				密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	春日宮陀羅尼子(西面版)	(個人)				密教	101	土/良(内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	正背3面版刷	X	奈良円國			
部	春日宮陀羅尼子(三方版)	(個人)				密教	101	土/良(殿内)上	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	正背3面版刷	X	奈良円國			
部	太山寺本堂内子	兵児	弘安1	1278	関子	密教(双手)	101	良(地蔵内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	長弓寺本堂内子	奈良	(弘安)	1279		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	雲山寺本堂内子	奈良	弘安8	1285		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	妙善寺本堂内子	福井	文永4	1296	御願子	密教	101	良(地蔵内)上	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	本山寺本堂内子(3基中1)	香川	(正安2)	1300		密教	101	土/良(殿内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	本山寺本堂内子(3基中3)	香川	(正安2)	1300		密教	101	土/良(殿内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	本山寺本堂内子(3基中2)	香川	(正安2)	1300		密教	101	土/良(殿内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	室生寺本堂内子	奈良	(延弘1)	1308		密教(双手)	101	土/良(殿内)上	三斗組	本口親	宝形/起/宝珠/宝珠以外後	半/併板/	〇	妙工寺保告口				
部	長良寺本堂内子(板除内子)	奈良	正和2	1313		密教	101	土/良(地内)上	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板、屋根後設	正面開版	〇	奈良文化財協会28			
部	明王院本堂内子	広島	(元祿3)	1321		密教	101	土/良(殿内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	浄土寺本堂内子	広島	(召延2)	1327		密教	101	土/良(内)上/台	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	所長谷寺阿弥陀堂内子	山口				密教	101	土/良(内)上/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	岩崎寺日蓮宗内蔵子	京都			密教(双手)	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	宝形/起/宝珠/宝珠以外後	正背3面版刷	X	大和古寺大図7				
部	高山寺山内陀羅尼子	京都			密教	101	土/良(殿内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口				
部	高山寺火輪宝珠合利子	京都			宝形	101	良(地内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	宝形/起/宝珠/宝珠以外後	正背3面版刷	X	奈良円國				
部	高松寺火輪宝珠合利子	奈良			密教	101	土/良(殿内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	奈良六大学大図7				
部	排三寺宝篋珠合利子	広島			密教	101	土/良(内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	奈良円國				
部	排三寺宝篋珠合利子	広島			密教	101	土/良(内)/台	ナシ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	奈良六大学大図12				
部	退屈寺鉢内子	奈良	(仁治1)	1240	(関子)	密教(双手)	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	宝形/起/宝珠/宝珠以外後	版刷	X	奈良六大学大図12			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	101	土/良(殿内)上	南木ナ	ナシ	板一枚	寄附/起/併板・天板	版刷	X	妙工寺保告口			
部	如空寺舍利子(地蔵内子)	奈良	延元1	1336		密教	10											

文末表3 中世の宮殿・天蓋折衷厨子

注1 ()は竈の年代が明らかで房子も同時と推定されるもの 注2 正面柱間・側面柱間、吹：吹き出し

注3 假：假告口、毎日口文：毎日新聞社『口文文化財』、奈六：奈良六大寺大図、口成：日本造像史基礎資料口成

地区	件名	品別	年代	西暦	呼称	形式・門分	平調	心調	斗舞	中曲	序	心	振 (鼓・竹)	尺	本曲	抄文・伝承
注1	注2				(1)在席時		注1	注2	注1	注2	注1	注2	注1	注2	注1	注3
京都	下叡寺本堂内厨子	漆置				白(内厨)/台			杵出	結組	振舞	輪舞入母屋/松紋(安板)	心磨打段戸	〇	祇園文・奥書	
室	本心神社本境内寶篋	密厨				白(内厨)/台、並延大流板	10x1		杵出三斗	結組	振舞	菊紋/松/安板・矢板	柳板	〇	祇園文・京書	
中	日光寺本堂内厨子	大分				白(内厨)/大(尺内)	10x2		杵出	ナシ	振舞	菊紋/松/安板・矢板	正色3面松戸	〇	祇園文・奥書	
	東城神社本境内内蔵	屏風				宝珠(手)	10x1		ナシ	結組	三斗	宝形/松/安板・矢板・心磨足	柳板	〇	祇園文・京書	
室	日輪寺本境内内蔵	塀玉				宝珠(手)	10x1		三斗組	結組	振舞	宝形/松/安板・矢板・心磨足	柳板	〇	祇園文・京書	
夜間	淨慈寺四国寺内蔵	東景				宝珠(手)	10x1		三斗組	結組	振舞	菊紋/松/安板・矢板	心磨打段戸	〇	京書・文書	
夜間	四心寺内蔵・文徳院内蔵	木殿				白(内厨)	10x2		大斗	結組	振舞	菊紋/松/安板・矢板	心磨打段戸	〇	毎日文書5	
	法華寺本境内内蔵 (多良木)	庫裏				密厨	2x1		杵出	ナシ	一斗口	菊紋/松/松紋/安板	2面柳板	〇	月刊文化財 冊59	
	遊鳥寺本境内内蔵	祇園	(卯辰4)	1500		密厨	10x1		杵出	振舞	振舞	宝形/松/安板/宝珠	ナシ	〇	長史文書	

(1997年7月10日原稿受理, 1997年11月5日採用決定)